

令和6年度 学校運営協議会及び学校評価に関する検証委員会第2回会議

1 日時 令和6年12月16日（月）午前10時～正午

2 場所 京都市総合教育センター 第1研修室

3 出席者

（1）委員

小松委員長、天笠副委員長、天野委員、梶谷委員、塩見委員、鈴木委員、竺沙委員、西川委員

（2）オブザーバー

京都市立学校代表者

（3）事務局

教育委員会事務局職員

4 次第

（1）開会

（2）協議（京都市の学校教育の充実に向けて（学校訪問等も踏まえて））

（3）委員長まとめ

（4）閉会

5 委員等の主な発言や質疑応答

※以下敬称略

（学校訪問について（組織、働き方改革等））

鈴木：校長のリーダーシップが強く、研究熱心で非常に驚いた。校長も話していたが、小中連携が今後の課題だと思った。

塩見：校長が先頭になって学校を引っ張っている様子がよく見えた。また、様々な生徒指導上の課題も踏まえながら、生徒によりそった教育を展開している印象だった。

天野：校長がリーダーシップを発揮し、様々な取組を進めている印象を受けた。一般の教職員がそれについていけるかも大切な視点である。

西川：校長が非常に理論的だったのが印象的であり、とても貴重な人材だと感じた。ただ、その校長の理論的な考え方・指導が教職員にどれだけ浸透しているのかが、分からなかった。今後の課題として、校長の思いを教職員に広げられるリーダー的な教員の育成が必要だと感じた。

竺沙：校長自らが勉強するだけに留まらず、教職員や地域に向けても自ら講師となり理論研修を開催するなど、その内容を伝えていこうとする姿勢が特に素晴らしく、信頼感にもつながっている。教職員には、校長が理論研修を通じて伝えようとしている意図をしっかりと受け止めてもらいたい。

竺沙：校長が働き方改革に強い問題意識を持っている様子を伺えた。教職員や保護者の意見にも耳を傾けながら、非常に大胆な取組を行っている。道半ばだと思うが、この先も頑張って取組を推進してほしい。また、リーダーシップは人それぞれだと思う。理想のリー

ダーシップ像を持ちすぎると、自分の特性と合わないときに不適合を起こし、しんどくなる。持ち味は人それぞれ、自身の持ち味をどう発揮して、前向きに取り組んでいくかが重要。

梶 谷：校長が1 on 1 ミーティング等を通じて、教職員とうまくコミュニケーションを取りながら、業務改善の取組を進めている点が評価できる。ただ、学校で新しいことを始める際に、最も抵抗感を覚えるのは、保護者だと思う。もう少し保護者に分かりやすく新たな取組の趣旨や効果について、説明する場があった方がよい。企業でも新しい取組を実施した際には必ず効果や課題について検証している。効果の検証については、欠かさず行う仕組みを設けてほしい。

塩 見：教育大学の生徒の教員志望が減っているという話を聞くが、1 on 1 ミーティングの実施など、新規採用職員でも溶け込みやすい工夫を感じた。

梶 谷：昨今、教員の働き方改革として、ICT を活用した事務作業の効率化や行事の精選など、様々な取組を行っていると思うが、それだけでは限界があり、抜本的に業務を減らすには、役割の見直しと明確化が必要となる。日本の小学校、中学校の先生は様々な役割を担い過ぎている。海外の学校では、基本的に教員は授業を教えるだけで、生徒の相談はスクールカウンセラーが行っている。なかなか難しいと思うが、先生の働き方改革には、そのような大胆な改革が必要である。京都市には、ぜひそのような学校をつくっていただきたい。また、教員不足の問題が話題に挙がっているが、近年、企業では最適な組織をつくるための企業主導の人事配置から、個人の成長やキャリア志向を踏まえ働く人によりそった人事配置を行うようになってきている。また、それらの取組をアピールしつつ、採用活動を行っている。教員の人事配置や採用の際にも参考にしてはどうか。

オガザバー：働き方改革に積極的に取り組まれていて、同じ校長として、ぜひ見習いたい。また、働き方改革によって生まれた新たな時間をどう教職員や子どもたちに資するものとするかが大切だと思った。

西 川：校長は3～4年で異動させなければいけないという厳密なルール設定がされている自治体もあるようだが、京都市ではどうか。

事務局：京都市では学校や地域の実態に応じて、校長の人事配置を行っている。校長に関しては、明確な年限は定めていない。

小 松：校長が自校の問題を把握し、生徒の自己肯定感を上げるための様々な手立てを実施している様子が伺えた。

天 笠：学校の目指すべき姿をグランドデザインと称して、構造図に分かりやすくまとめて、教職員に共有しているのがよかった。ただ、目指すべき方向性が、教職員一人一人へどこまで浸透しているのか検証委員会の活動の中では捉え切れなかった。学校訪問を通じて、今後そういったところまで分かるようになれば、検証委員会として、より適切な評価ができるようになる。

(学校運営協議会について)

- 西 川：学校運営協議会として、教育の質の向上のための取組や、企業と学校との橋渡しなど、学校に貢献している様子がうかがえたが、洛南中学校や近隣の学区のことについては、ほとんど意見が聞かれなかったのが残念だった。祥豊小学校は「京都“^{イチ}1”美しい学校」を目標に掲げているが、その目標を中学校区、南区全体に広げるような発想を期待する。
- 天 笠：学校運営協議会としても、校種間の連携についての課題意識を持ってほしい。これまでの学校運営協議会は、各学校や地域の中での活動にとどまっていたが、この間で活動も成熟してきており、次のステップとして、進学先の中学校や入学前の施設との連携を意識した活動を行ってほしい。学校運営協議会の委員の中には異なる校種の委員を掛け持ちしている方もいる。そうした方に立場を活かしてもらうのも一つ。
- 天 野：学校運営協議会は単なる報告の場ではなく、地域と意見交流するものであってほしい。
- 塩 見：学校運営協議会のメンバーに児童館の館長が含まれている点はとても良いと思った。
- 小 松：学校運営協議会のメンバーや取組について、保護者や地域にはまだまだ認知されていないように感じている。
- 天 笠：学校運営協議会の取組について、学校運営協議会の委員を孤立させない、という観点からも、教職員や地域にしっかりと理解してもらうことが課題だと感じた。
- 西 川：学校運営協議会の理事には年限を設けているか。
- 天 野：私の地元の学校運営協議会では、年限は設けていない。各ポスト（PTA や地域団体など）の長が担うような仕組みを取っている。
- 西 川：任期制の導入についても検討する必要がある。
- 小 松：学校運営協議会のメンバーの固定化を防ぐためには、ポストの多様化や任期制の導入等の制度設計についても検討する等の工夫が必要になる。
- 西 川：他府県の事例を見ると、見守り隊や校区内の美化活動のみにとどまっている学校運営協議会も増えてきている。そんな中、京都市の学校運営協議会は様々な先進的な取組を進めている。京都市の学校運営協議会の取組を全国に発信してほしい。

(学校評価について)

- 小 松：学校評価のアンケートの設問設定や活用の仕方について、工夫が必要である。
- 天 笠：学校訪問に行った両校とも、学校評価の結果について、学校だより等で保護者に周知できていたが、学校運営協議会が学校評価にどう関わったか、自己評価をどう評価したかまでは書いておらず、そこまで踏み込んで情報発信してほしい。
- 小 松：学校運営協議会でこういった議論がされているか、例えば理事会の次第（議題）や議事録などが公表されるとよい。
- 天 野：学校運営協議会で議事録を作っているという話はあまり聞いたことがない。
- 事務局：学校だよりや学校運営協議会だよりで、学校運営協議会の議事の内容を紹介されているケースはよく見る。

小 松：学校だよりではなく、学校運営協議会だよりから情報発信される必要がある。また、学校運営協議会の取組を保護者に認識してもらうためにも、学校運営協議会からの積極的な情報発信が重要。学校の HP に学校運営協議会のページがある学校も少ないと思うが。

事務局：教育委員会としては、学校の HP に学校運営協議会のページを作るようお願いしており、近年、増えてきている。

（校種間連携について）

天 笠：昨今、幼小の接続や中高との接続に関心が持たれるようになってきたが、これは小中一貫教育については、これまでの取組が蓄積され、土台が出来上がってきたからだと感じている。今後は 0～18 歳までの連携を視野に入れた小中連携が大事になってくる。

小 松：今後の京都市の教育として、0～18 歳を見通した教育を組織的に行ってほしい。そのためには、行政、教職員、地域等が連携して、未来の京都を支える子どもたちを育てる必要がある。また、教育委員会には、この場での議論を受け止めて、学校・子どもたちへの支援を行ってほしい。

西 川：小中一貫教育については、先進的な取組をしている学校への視察等を通じて、推進してもらいたい。

鈴 木：ハードルは高いと思うが、小学校の先生が就学前施設を見に行く取組はぜひ進めていただきたい。また、学校訪問当日、小学校に来ていた図書館ボランティアに話を聞くと、児童館や近隣の就学前施設でも活動しているという話だったので、そういった人材を通じて連携することも検討していただきたい。

オブザーバー：私の幼稚園では、近隣の子ども園とともに、地元の小学校に行って児童と交流する機会を年に 5～6 回設けている。また、幼稚園の公開保育も定期的に開催し、小学校の校長にも来てもらうなど、幼小連携を進めているところ。

オブザーバー：本校は小中一貫校であり、小中一貫教育を行う上で非常に恵まれた環境にある。9 学年が同じ学び舎で学校生活を送るので、異学年交流が活発であり、教職員も 9 学年の児童・生徒の学びに携わっているという意識を持ち、義務教育の 9 年間で育てる子ども像に向かって、取組を進められることが何よりも強みだと感じている。

（ICT 活用について）

梶 谷：多くの学年で ICT 端末を活用した授業が浸透していたのはよかったが、2 年生の図形をつくる授業（算数）については、ICT 端末を使用しなくてもよいと感じた。海外では、脳の活性化につながるという観点から、デジタルの取組を減らし、本を読む時間などのいわゆるアナログな取組へシフトしているという話も聞く。今後は単にどんどんアプリを使うといったことではなく、活用方法（ICT で何ができるのか）を学ぶことも必要。

天 笠：祥豊小学校 2 年生の授業で上手に ICT 端末を活用している様子を見て、学校の指導の成果だと感じる一方で、学校の方針として、デジタルとアナログを融合させた教育をどのように展開していく構想なのが気になった。ICT 化が進む中、デジタルとアナログの融合、バランスを考えた学校空間の在り方を検討する必要があると感じた。

(地域との関わり等について)

天 野：学校として、地元企業に施設見学を行いたいとなった際に、学校が頼む前に地域の方々が、企業の社長に話を通してくれたという話を聞くほど、地元と良好な関係を築くことができている。

鈴 木：地域の人間として、学校で起こっている不登校やいじめなどの課題について聞く機会があり、学校のために、子どもたちのために、何か協力したいという気持ちはあるが、何もできていない現状がある。学校には、もっと地域を支えている人を認め、信頼し、活用していただきたい。

塩 見：昨今、PTA にも町内会にも入らないなど、保護者の無関心化が進んでいることに危機を感じている。PTA や地域がどのような活動等をしているのか、多くの保護者に知ってもらい、参画してもらえよう積極的に情報発信することが改めて大事だと思った。また、学校訪問を通じて学んだ他校の取組を、地元の PTA や地域でも実践し、組織の活性化につなげていきたい。

天 野：生徒に挨拶をしたところ、返事が返ってこなかった生徒が多くいたのが残念だった。生徒と地域の交流の機会を増やしていく必要がある。コロナ禍を挟んで、人間関係の希薄化し地域の力が下がっている。これからも地域が活発になるために、若い人に関わってもらえるよう努めていきたい。

竺 沙：地域と良好な関係を築き、地域を上手く巻き込みながら取組を進めている点が印象的だった。京都市には、地域のことを考え一生懸命活動してくれる人材がまだまだいると感じている。学校や地域に無関心な人が増えているが、無関心にも理由がある。学校運営協議会や学校評価の制度は、貴重な財産の一つである。社会の変化に柔軟に適応させていく視点も重要になる。

(その他)

竺 沙：学習適応感が上がらないという課題に対しては、生徒と共に考え、生徒と関わりながら教員も成長するという姿勢を求めたい。

天 竺：校長の説明が要領を得ていてとても分かりやすい。他校の校長にも、そのスキルを共有してもらいたい。

鈴 木：給食の時間の生徒との会話の中で、地域の人に話しかけられることについて、「自分が小さかった頃の話を読めると恥ずかしいこともあるけど、うれしい」と話していた。また、おすすめのメニューや片付けなどについて、生徒が教えてくれ、屈託のない姿が見ることができてよかった。

天 竺：給食時間の生徒との交流を通じて、私への気遣いが素晴らしく、生徒の応接が上手だと感じた。このように子どもと直接接し、様子を見ることが出来る機会は貴重だと思った。また、給食について、学校教育活動全体の中での位置付け、意義を認識し、目的やねらいを定め、より効果的な活動になるように工夫して欲しい。

事務局：学校給食の在り方は、学年や年齢によって位置づけが変わる。例えば、低学年であれば、教員主導でしっかり時間を確保し食べさせる。中学生であれば、生徒自身に時間の管理を行わせるなど。目的が変わってくる。かつては生徒指導的な意味合いが強かった。

オグザバー：様々な家庭状況の子どもがいる中で、学校給食により、一日の中で確実に食事をとれる機会が保障されていることや家庭では日常的には食べない食材を食べることができることに非常に意味がある。一方で、給食時間の捻出が厳しい現状もある。また、コロナ以降、会話をしながら食べる場面が減った印象を受けている。

梶 谷：給食の時間は授業と比べ自由度が高い。目的を食育にするのか、コミュニケーションを取る時間にするのか、自分で考えて動く時間にするのか、設定次第で子ども一人一人にあった学びができるのでは。

小 松：他の自治体では、朝ご飯を食べてこない子どもが多く、首長の一声で、給食改革を行ったところもある。

天 笠：京都市では、給食でカフェテリア方式をとっている学校はあるか？

事務局：小学校、中学校ではない。

天 笠：昨今、修学旅行の際に宿泊先の朝食で意図的にカフェテリア方式を経験させることがある。食事時間の取組についても、いろいろな目的意識を持って取り組んでほしい。